講演会
「インドに伝わる知恵とこころ　北インドの昔話・なぞなぞ・子守歌から」

拓殖大学教授　坂田　貞二

こんにちは、北インドの昔話を研究している坂田貞二です。

お渡しした講演会資料に書いてありますように、きょうは知恵とこころのことを、北インドの昔話、なぞなぞ、子守歌を事例として考えてみたいと思います。

まず、前置きになりますが、きょうの話の進め方と目標は、いまインドに語り伝えられている話を四つ取り上げて、その話のなかで人々がどういう気持ちを伝えようとしているのか、そういうものから語る人の心の内側を知りたい、そして、その温もりを、インドの人たちから、わたしたち日本の者が受けとれるようにしたい、ということです。こういう温もりは、インドや日本というような限られた地域のことではなく、どこの人の心にもあることだろうと、皆さんにお伝えしたいと願います。

具体的に言えば、わたしはいろいろな仕事をしていますが、いま一番大事な仕事は、6 歳、3 歳、2 歳の孫のじいちゃんとして、その孫たちにインドの楽しい話を聞かせたいという気持ちがあります。その延長線上で、きょう皆さんにも楽しんでいただければありがたいという、私的な発想でここに来ております。

ここに持ってきている材料は、いま語り伝えられているものを、わたしが集めてきました。そちらの展示では、主に古典的な説話が、いまのインドの子どもたちと日本の子どもたちのために書き直された本を出しています。これからわたしが御紹介するのは、主にいまなお書かれないまま伝わってきたもの、それを、その現地の人たちから聞かせてもらい、日本の人たちに伝えたいと願いながらわたしが訳した昔話です。レジメを御覧下さい。2 枚からなっていますが、[Ⅰ]の「昔話・なぞなぞ・子守歌で伝わる知恵とこころ：先人からつぎの代に」は、きょうのわたしの講演の目的を示しています。[Ⅱ]の「北インドの昔話が伝えようとするこころ：誰から誰へ、どういう場で伝わるのか」とした部分は、昔話の四つの事例（A、B、C、D）を挙げています。ハイライトのところを台詞や歌で紹介しています。ハイライトのところを読むと、あるいは歌うと、話の大筋がみえるであろうと思います。

わたしは最低限の情報だけ出して、ここに出ていることから皆さんに話の内容をお察しいただきたいと思います。[Ⅲ]の「なぞなぞと歌」というところがあります。そこを御覧下さい。なぞなぞですが、伝承的に伝わっているものもたくさんあります。A の「なぞなぞ」のうち、（1）のところはわたしが作りました。この講演が決まってから、自分の孫に出すインドの動物に関するなぞなぞを作ってみようと、「鼻が長いぞう」と言ったら、「じいち

ゃん、わかったよ、ゾウだね」と答がありました。そのつぎに、「背中に山をしょって歩くだ」と言ったら、多摩動物園でラクダを見ているはずですが、わからなくて、「ラクダだ」と答えを言ったら、「そんなの、わからない」との答でした。そのつぎに（2）以下です。これは、「なぞなぞ」の（2）と B の「子守歌」ですが、それはみんな中部インドのブンデール地方から集められたものの翻訳です。このなぞなぞを考えてみてください。「二人が出会って挨拶すると：近寄って 4、キラッと白く 64、合掌して 20。」これをいま実際にしてみしましょう。親しい人が道で会いました、近寄ります。すると足が 4 になる。ニコッと笑うと、二人の歯が白く輝いて 64。そして、合掌します。指が 20、というなぞなぞです。先ほどこの講演会全体の進行をしていた鈴木千歳さんが、『チャンパの花』という雑誌を編集していらっしゃいます。その雑誌のつぎの号に、わたしはなぞなぞ集を翻訳しましたから、機会がありましたら御覧下さい。なお、それは国立国会図書館にも寄贈してあります。普通は手に入りにくい会誌ですが、皆さん国立国会図書館で見てください。国立国会図書館にあるものは地方の図書館で、図書館同士の貸し出しで、北海道の方でも鹿児島の方でも御覧になれます。

それから、子守歌「ねんねんする子は大きくなって、王さまみたいに偉くなる。猫がニャンニャン、犬ワンワン。都のおべべを買ってこよう、可愛い帽子も買ってこよう」。日本の歌でも、「ねんねんころりよ、おころりよ。坊やは良い子だ、ねんねしな。デンデン太鼓に笙の笛」というのがありますね。そういう珍しいものを買ってきてあげるから、はやく寝なさいという寝かせ歌です。誰でも、可愛い自分の子どもに対して、こういうことをしているのです。皆さん御関心があれば、いろいろな地域の寝かせ歌を探してみると面白いかもしれません。

しつけ歌は面白いです。「お顔に泥がついてると、カアカア烏に食われるよ。きれいなお顔と手になって、牛乳とお菓子のおやつだよ」。手を洗いなさいという説得力があります。これを孫に歌ってみたら、「外で遊んできたら、手を洗うに決まっているよ」と、けっこう生意気なことを言います。

そこで、本体の昔話に入りますが、その前に昔話の内容についてわたしはごく少ないデータを示して、皆さんに内容を考えていただきます。その上で、ハイライトのところの語りや歌を録音で聞いていただきます。それから雰囲気がわかるような絵も、ここで映して御覧にいれます。ではまず絵をお願いします。これは、西岡由利子さんに描いてもらった絵です。村の家のつくりです。外でおばあさんが糸を紡いでいます。正面に門があって、そこを入っていくと中庭になります。中庭がどうなっているのか御覧下さい。中庭は屋根のない吹きぬけで、女の人や子どもがくつろぐ空間です。昔話や民謡が聞ける場です。

それでは、皆さんに遊びに加わっていただきたいのです。先ほどのなぞなぞで、周りの人とあいさつしましょう。いま皆さんは座っていらっしゃいますので近寄れませんけれど、気持ちとしてお互いに近寄って、ニッコリ笑って合掌してください。合掌するときは「ナマステー」と言ってください、あなたに敬意を表しますという意味です。ですから、朝で

も昼でも夜でもよくて、会ったときでも別れるときでも「ナマステー」と言います。それをしていただいて、周りの人と仲良しになっていただいて、話し合いごっこに加わっていただきたいのです。みなさん、合掌して「ナマステー」とあいさつなさいましたね。

それでは、「しっぽをつかまれた山犬」という話です。A のところに書いてありますが、山犬が「おれのしっぽをつかむがいいさ、おれはごちそうたっぷり食うぜ」と言うと、お百姓が「おれのごちそう食うのなら、おまえのしっぽをちょんぎるぞ」と脅しているのです。これが、結びのところの山犬とお百姓の掛け合いです。どういう場面で、どういう状況でこうなったのでしょうか。山犬は藪に隠れています。山犬とはジャッカルです。人里近くに住んでいて、弱い動物をいじめたり人の何かを盗んできたりということをするので、汚らわしい動物とされています。

展示では『青いジャッカル』というのが、古い話であったと思います。染物の桶に落ちてしまって、青くなった。それで、青くなったら特別な生き物だと思われて、周りから恐れられていていて、偉そうに威張っていたけれど、ある日ジャッカルの声で「フォワーン、フォワーン」と鳴いてしまったら、正体が露見して周りの動物に八つ裂きにされたという話です。山犬というのは、悪知恵が働くけれど、昔話や説話では必ず失敗するのです。

さてここで御紹介する昔話では、お百姓のところに奥さんがお弁当を届けに来ます。その途中で山犬が待ち伏せしていて、お弁当を力づくで奪ってしまいます。そこで奥さんが困って旦那さんにこぼしたら、どうしたでしょうか。男の格好で行ったら山犬は逃げるだろうから、お百姓は奥さんの衣装を借りて山犬が隠れている所へ行った。山犬はいつもの通り、「おれのしっぽをつかむがいいさ、おれはごちそうをたっぷり食うぜ」と強がりを言うのですが、お百姓はそういうことが分かっていますから、「おれのごちそうを食うのなら、おまえのしっぽをちょんぎるぞ」と言ったわけです。

これは、レジメに書いてありますが、10 歳の男の子が語っています。語り口を聞いていただくと、雰囲気がわかります。お願いします。（テープ再生）全体を早口で懸命に語っていますね。けれど山犬とお百姓のやりとりの韻文の文句は、上手に語っています。子どもは話をちゃんと覚えていないかもしれませんが、韻文、歌になっているところは正確に耳で覚えているのです。子どもは話を受け入れていく段階で、耳に残る音をとらえます。それが大きな力になるのではないかと感じます。展示に出ている、古典説話集『パンチャタントラ』や『ヒトーパデーシャ』、あるいは『ジャータカ』も要所要所にそういう韻文、歌が入っています。歌や韻文は、伝承の大筋を伝えていく有力な力です。

それではつぎは、そこに書いてある昔話の事例、B の「天にのぼるベールの木」です。この絵は、偕成社で出しているものの表紙です。この本と表紙は、伝承の方に展示してあります。この絵は、西岡由利子さんといって、西インドと東インドの両方の絵のスタイルを学ばれた方に描いてもらいました。もらいましたと言うのは、出版のときに絵を描いてもらいました。本が出たときに西岡さんに、「わたしに下さい」と頼んで本当に原画をもらいました。ですからその原画は、わたしの個人蔵です。さて、B の文句を御覧下さい。ベール

の木になった妹が「兄さん、どうしよう、父さんの使いが花を摘みにきたわ」と、兄に助けを求めます。

そうするとマンゴーの木になった兄が、「妹よ、心配いらないよ、天に昇ればだいじょうぶ」と、励まします。物識りに教わってマンゴーとベールの木を切った鳥追いの女が「ああ、わたしの子どもたち」と、子どもたちを抱きよせます。

この話の出だしと背景をお話します。王様の家でもめごとがあって、生まれたばかりの男の子と女の子が川岸に捨てられてしまいます。一緒に生まれたのですが、ここでは兄と妹とされています。捨てられると、そこで死んでしまうというケースが地域によってはよくあります。けれどヨーロッパやインドでは、それがよく再生します。生まれ変わります。それで生まれ変わったのが、兄の方はマンゴーの木、甘い実のなるマンゴーです。妹の方がこのベールの木です。ミカンのような味がするもので、皮がかなり硬いのですが白いきれいな花が咲きます。その花がはらっと落ちて、それを小鳥がつまんできて、王様の頭にフワッと置いた。父さんの使いが（「父さん」というのは王様のことですが）、迎えに来た。わたしの花を摘みに来た。そうすると、父さんと母さん、あるいは宮廷にいた別の母さん、複数のお妃たち（異母）がこの子にとっては脅威なのです。そうするとどうなりましょうか。その花がきれいなので、王様がこの花を手に入れてくるようにと命じます。王さまの使いを見たベールの木が歌を歌って、「兄さん、兄さん」と呼びかけています。それに対して兄が「花を摘みに来た人がいたら、天に舞い上がれば大丈夫だよ」と教えます。兄の心遣いです。そうすると不思議な木ということで、王様はなおさら気になります。王様は、どうして木が天に昇るのか不思議なことだと言って、国中におふれを出して「誰か調べてこい」と命じます。そうしたら非常に賢い学者がいて、その人がわけを説明します。何かあったときには、国のどこかに必ず賢者がいることになっていて、その賢者が「その謎はあの鳥追い女に聞けばわかる。そのほかの者にはわからないだろう」と教えてくれます。そして、鳥追いの女が連れてこられます。賢者があの二本の木を切るようにと、鳥追いの女にそっと教えてくれました。切る方は、樹木には精霊が宿っているという信仰がありますから少し抵抗を感じるのですが、切ります。切ったら木が倒れるのですが、西岡さんの絵では倒れずに可愛い女の子がそこに現れました。12 年経っていたから、12 歳。お兄さんの方は、マンゴーの木を切ると、立派な男の子がそこに立っていた、ということです。つまりこれにはわけがあって、家を追われた子どもが、樹木となって再生して、それがつぎに、人間にまた戻るという話です。それでは、妹と兄のやりとりのさまをテープで聞いてみます。51 歳の女性の語りです。先ほどは、10 歳の男の子が覚えかけの話を早口で語りました。51 歳の女の人というのは、インドの農村でいうと一家のりっぱな主婦であって、一家を切りまわしている人です。ではテープをお願いします。（テープ再生）ゆったりとした語り、落ちついて心にしみる歌いかたですね。

さて、うっかりしましたが、最初の昔話 A「しっぽをつかまれた山犬」が伝えようとする「こころ」は、どういうことだったでしょう。そのこころはたぶん、単純・明快です。つ

まり、ずるい者はそのときはいいけれど、いつかは罰せられるということです。動物昔話には寓話性が非常に強く、子どもに説得力があるだろうというふうに思います。ですから、そういう意味ではこれは単純で、邪なこころをもっていればいつかは罰せられるという教えになります。それにくらべると、昔話 B として御紹介した「天にのぼるベールの木」の場合は、複雑です。つまり、一軒の家の中の複数のお妃がいるところでの葛藤が根本にあります。それから、捨てられた子どもたちが樹木になって再生する、そしてそれが元の人間に戻るというマジックです。昔話の中で、超人間的な力が働くことがあります。わたしがいままで見てきたところでは、インドやヨーロッパでは、そういう超人間的な力が働いて一度殺された者が蘇るケースがたくさんあります。日本だと、継母に殺された子どもたちは、鳥になるけれど人間に戻っていないケースがある。つまり、日本の昔話では、ぜんぜんないわけではないけれど、マジック、魔法、呪術というものが、人間の生命の復活についてさほど強く働いていないようです。

わたしの息子と娘は 4 つ違いですが、子どもたちが小学生だったころ、右側に息子を置いて、左側に娘を置いて寝かしつけるときにインドの話を聞かせました。こういう話をすると、娘の方は小さいから「怖い、かわいそう」と言って泣き出します。息子の方は呪術があるのを知っているから、「大丈夫だよ。父ちゃんの話は主人公がちゃんと生き返るのだから、安心して聞いていろよ」と言います。超人間的な力が、善き人には働くのだと息子はわかっていたようです。

それではつぎにいきます。レジメの昔話 C のところです。「みごとな裁き」。これは 51 歳の男の人が語った話です。女 1 が「この子はあたしの子です」。女 2 が「いいえ、あたしの子です」と一人の子を奪いあいます。それで王さまが、「どちらの子かわからないから、子どもを割いて連れてゆくがよい」と言う。すると、女 2 が「おやめください。その子を割かないで、その人に渡してください」と退きます。その人に渡して下さいと言った方が、本当の母親です。これは「子引き裁判」といって、日本の大岡裁きの話にも出てきます。

この話で考えるところがいくつかあると思うのですが、なによりも、母親と子どもの絆の問題です。先ほどの鳥追いの女のこともありましたが、母親と子どもの関係の強さが、どこの世界でもそうですが、インドの昔話を聞いていると非常に頻繁に出てきます。わたし自身がそういうことを意識しているから、そういう話を優先的に翻訳しているかという気もします。

では、0 の「ガネーシュ神の祭り」にいきます。これは 74 歳の女性の語りです。（スライドの写真で示して）この小柄な人です。「はじめの話のようにみんながなって、後のようにはだれもならぬように」というのが、このおばあちゃんの結びです。祭りの前夜に貧しい家に薄汚い子どもが転がり込んできた。豊かな暮らしの姉の家で断られたあと、貧しい暮らしの妹の家に薄汚い子どもがきたのです。子どもは、「泊めてくれ、飯を食わせてくれ」と言います。そこの家にはろくに食べさせるものがないのだが、かわいそうだから追い出すわけにもいかない。それが、ガネーシュ神を祭る前の晩だったという前置きです。そう

したらそこの家では泊めてくれたのです。そして夜中に、「腹が痛え、うんちたれてえ」とその子どもが言うと、そこの家の主婦はお腹が空いているしくたびれているから、イライラして「うるさい。どこでもしなさい」と言って寝てしまった。

翌朝起きてみたら、大事な竈にウンチがしてあったのです。いつの間にか竈にウンチをしてしまった。ところが薄汚い子どもが去ったあとで、竈から黄金が出てきた。それが、ガネーシュ神のお祭りの当日のことであった、という話です。汚らわしいもの、この場合は糞ですが、それが黄金になっていたという話です。それから、死体が黄金になる話もインドにはあります。それは皆さん御存知のように、日本の「大歳の客」と同じです。大歳に貧乏な人が来て、泊めてあげたらその人が死んでしまった。死んだから仕方がないので、むしろをかけて隠します。お役人に知られたら大変ですから。翌朝お正月になってみると、死体が黄金に変ってきらきら輝いているという話です。もう一つあるのは、日本の昔話では幾つかありますが、座頭、目の悪い人が泊まって、居眠りしているうちに囲炉裏に落ちて焼け死んだ。それで困ってその死体を置いておいたら、その死体が黄金に変わったという話です。年の終りやある季節の区切りのときにこういう話があって、貧しい人が困っている人に優しくしたところ、その人に福がきたという話です。

このおばあちゃんからわたしはたくさん話を聞かせてもらいました。この話では、「はじめの話のようにみんながなって、後のようには誰もならぬように」という願いと祈りに注目しましょう。つまり、前の方の、妹が貧しい人に親切にしてあげたと話したところですが、1 年に 1 回のお祭りですから、まねをするならつぎの年です。つぎの年を待っていたお金持ちの姉が、誰かが来るのを待っていて無理やり家に連れてくれる。それで、旅の人がウンチをいっぱいするようにいっぱい食べさせる。ウンチをして「拭くものがねえ」と言う子どもに、「わたしの髪の毛ででも拭きなさい」と言って、あたまにいっぱい塗らせた。翌朝起きてみるとウンチはウンチのままで、「ああ、臭いこと、臭いこと」というところで話は終ります。

この話の温かみは、後のようなことをするとこうなってしまうのだという戒めではなく、世の中にそういう人が一人もいないようにという、お祭りのときの願いを示していることにあるとわたしは理解します。おばあちゃんの心がそこに込められているという気持ちがします。よくあるのは、悪いことをすればこうなるに決まっているだろうという訓戒ですが、この話は訓戒なしで、皆が幸せになって欲しいという祈りです。（テープ再生）「はじめの話のようにみんながなって、後のようにはだれもならぬように」と言って、話を結ぶところです。

さて、こういうふうに考えてきて、[III]の「なぞなぞ」のところははじめにお話ししましたので飛ばしまして、[IV]の「まとめ：知恵とこころを継承するために」というところです。先ほどの、ジャファさんの話にもでてきましたが、学問・知識ではなくて、知恵が大事だということです。わたしもつねづねそう感じているので、知識ではなく知恵という言い方をします。それがいまのインドでは、比較的上手くこれまで継承されているとわたしは感

じています。冬の寒いとき、毛布で子どもを懐に抱いて話を聞かせ、夏の暑いときは中庭や外の涼しい所に行って話を聞かせてあげる。それから、母親が家事をしながら子どもに聞かせてあげる。つまり、肉声で語りかけて、心と体を包んでやるというなかから、知恵とこころが伝わっていくのです。

そうすると、小さい子どもも早く語れるようになりたいと思うことでしょう。そして、少し語れるようになると、誰かに語りかけることによってそれが定着する。わたしは北インドで、こういう場面を見てきました。

ところがこのところ、インドも危なくなってきました。このごろは、インドの村でもテレビのアンテナがたくさん立っています。いま 50、60 歳くらいの人は昔話をかなり知っています。けれど子どもたちがテレビに惹かれて「語り」の聞き手がいないから、語り伝える場が少なくなってきているのです。わたしのようなよそ者でも一ヶ月くらいいると、年配の人が昔話を思い出して語ってくれます。つまり聞き手が耳を傾ければ語りは伝えられるが、聞き手がいないところでは消えてしまうのです。

きょう御紹介した事例から思うのですが、語りや歌は、聴く人がいてはじめて伝わるのでしょう。

親しい人のあいだで語り、歌い、それを聴いて楽しむ場があることが大切です。

それが、インドでも日本でも、自分のこころの場なのでしょう。